

JCLA

日本比較文学会東京支部

研究報告

No. 17- 2020

# 目次

## 記録

- 第57回東京支部大会「シンポジウム」傍聴記 内山 加奈枝  
..... 3
  
- 研究発表 2019 年  
..... 11
  
- 執筆者一覧  
..... 14
  
- 編集後記  
..... 15
  
- 投稿規定・執筆要領  
..... 16

## 《記録》

### 第 57 回東京支部大会「シンポジウム」傍聴記

内山 加奈枝

支部大会が開催される一週間前には、実に 42 年ぶりに命名された大型台風「令和元年第 19 号」が東関東を襲い、国の式典やラグビーワールドカップの試合が延期された。台風が一週間後であったならば、東京大会は、延期どころか実行できなかったかもしれない。小規模とはいえ、会場や懇親会の予約、シンポジウム講師や研究発表者のご予定、なにより各会員への告知などを考えれば、日を改めることは難しかったように思う。

前置きが長くなったが、第 57 回東京支部大会は、東海大学高輪キャンパスにて予定通り 10 月 19 日に開催された。台風による影響や当日の雨天が心配されたが、令和最初となる東京支部大会シンポジウム「現代幻想文学の可能性を探る―「私」「自己」のテーマ群を中心に―」は多くの聴衆を集めた。

大会の目玉となるシンポジウムは、約一年前から準備されるが、まずは構想段階にまで遡りたい。クリエイティブ・ライティングや人文系学問領域に対する言説など、六つほどの多彩なテーマが提案された中で選びだされたのは、一見地味ともいえる「泉鏡花没後八十年」を記念する案であった。最終的に、泉鏡花というひとりの作家から、「幻想文学」というジャンルへの飛躍があったのだが、「分身」ものに代表される「私が疑う私」というサブトピックを立てるまでには紆余曲折があったので、その過程を紹介しておきたい。

泉鏡花からまず連想されたのは、谷崎潤一郎、稲垣足穂、江戸川乱歩、澁澤龍彦、芥川龍之介など近代日本文学者にみられる「人形愛」であった。女人幻想という文脈を西欧にまで広げると、ポーも含まれうるし、美の権化としての女形ロボットとしては、19 世紀のホフマンやリラダンにまで広げることができる。

また、人間の労働力の代わりに担う「ロボット」という造語を生み出したのは、カレル・チャペックの『R.U.R』(1920) であるが、最初の SF とも言われるメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818) では、人体を活用する生体ロボット、いわば改造人間としての「サイボーグ」概念が生み出されている。

虚構における「ヒトガタ」の表象は、近代に端を発するわけではない。古代ギリシア神話のピュグマリオン伝説やユダヤ教の伝承に登場するゴーレムにまで遡ることができる。「人間もどき」を志向する想像力は、現代の大衆文化に受け継がれ、ゴジラやゾンビ、吸血鬼、人工知能に至るまで、「人間」の境界線を問い続けている。

可能な限り大きな枠組みの中で「幻想文学」を討論するため、シンポジウムの題目には、どこにも「人形（ひとがた）」というキーワードは含まれていないのだが、「人間もどき」あるいは「ポストヒューマン」を模索してきたジャンルとして、「幻想文学」を取りあげることになった経緯をお示しできたと思う。

こうした前提を踏まえて、チェコスロバキア文学分野からは東京大学准教授・阿部賢一氏、英文学分野から国際基督教大学教授・生駒夏美氏が講師として選定された。また学会外部からは、優れた近代日本文学研究でその名を知られる早稲田大学名誉教授・千葉俊二氏をお招きすることになった。そして、司会は東京大学名誉教授・井上健氏である。

ニューズレターにも掲載された趣意書において、井上氏が幻想文学への切り口として最初に提示されたのが、ツヴェタン・トドロフの『幻想文学論序説』(1970)である。トドロフは、合理的説明のつく超自然（怪奇）と説明のつかない超自然（驚異）のどちらに転ぶこともない「ためらい」を、作中人物とテキスト内部に内包された読者が共有するときに幻想が成立すると考えた。

こうした前提の中で、井上氏が幻想文学へのアプローチとして提示されたのが「分身」のモチーフであった。探偵小説の生みの親でもあり、心理ゴシックを発展させたポーは、その短編『ウィリアム・ウィルソン』(1839)において、近代的な統一的自我観の根底を揺さぶる「分身」の主題を打ち出したが、日本においても、大正期以降、谷崎、佐藤春夫、芥川龍之介から梶井基次郎へと「分身」を主題とした作品は途切れることなく引き継がれている。

井上氏は、「分身」ものによって転倒を図られた「自己」の概念がなにより政治的・社会的・歴史的構築物であり、日本を含む非西欧文化圏においては、西欧近代的な模範との対比において、比較文学・比較文化的な問題意識が必要とされる旨を明示された。もちろん、「分身」のモチーフは、文学から映像文化、サブカルチャーにも越境し、ますます旺盛な主題であり続けるが、今回のシンポジウムでは、「文芸ジャンル、テーマ、ディスクール」に限定して追究する旨を明らかにされた。

ゆえに、当日のシンポジウム冒頭で井上氏が強調されたのは、現実世界に確信を持たない「私」が、幻想小説においてどのように描写されるのかというディスクールの問題であった。一人称なのか三人称なのか、客観的描写なのか内面描写なのか判別しがたい川端康成のテキストや、再帰代名詞や仮定法が駆使され、主体が今見ているものも断言できないといったポーの文体を引用され、幻想を表現するための言説をシンポジウムの土台とされた。

これより、ご登壇順に各講師のご報告内容を紹介したい。阿部賢一氏が出された副題は、「増殖し、分裂する「私」：20世紀初頭のプラハにおける「人造人間」

と「分身」の系譜」である。阿部氏は、ミハル・アイヴァスなど、現代チェコの幻想文学を翻訳されているが、今回のシンポジウムでは、チャペックと同時代に活躍したチェコスロバキアとオーストリアの作家たちが紹介された。グスタフ・マイリンク、リハルト・ヴァイネル、カレル・チャペックの兄ヨゼフ、ヤロスラフ・ハシェクらは、いずれもプラハに所縁のある作家たちで、1910年代から20年代にかけて、「分身」をモチーフとした作品を残している。

カレル・チャペックの『R.U.R』が世に「ロボット」という用語を知らしめたことはよく知られるが、「ロボット」という名称の発案者はカレルの兄ヨゼフによる。ヨゼフは、画家であり、文筆家でもあるのだが、阿部氏が紹介されたヨゼフのデビュー作『レリオ』(1917)では、自らを「おまえ」と呼ぶ二人称の文体の中に魂の不安をみてとることができる。

カレル・チャペックの『R.U.R』は、大量生産・消費文化を基盤とする現代に、ゴーレム伝説を取り入れた作品といつてよいが、オカルティズムに関心を持っていたドイツ語作家マイリンクの『ゴーレム』(1915)は、チャペックとは異なる形でゴーレム伝説を継承している。記憶を失った語り手「ぼく」は、19世紀末のプラハ、ゴーレムの伝承が残るユダヤ人街を自動人形のように徘徊する。語り手は、ゲッターに生きる人々が、プラハの建物群に生命を与えられた自動人形ゴーレムのように感じると感じる。阿部氏が、歴史という厚みを持つ都市空間と主体の分裂としての分身の関連性に着目されたのが興味深い。

カフカより一歳若い、チェコ系ユダヤ人作家リハルト・ヴァイネルの短編小説『分身たち』(1916)では、戦争という、尋常ではない状況で出会った兵士同士の同性愛的な合一が描かれる。カフカと同時代にプラハに住まい、カフカと生年も同じチェコ語作家ヤロスラフ・ハシェクの『オーストリアの税関』(1912)は、ユーモラスなSF仕立てで、急行列車にひかれ、家畜から金属まで雑多な異物で全身移植を受けた男が税関で足止めをくらう。

阿部氏が紹介された作家たちはいずれも、「分身＝他者」を描いているのだが、マイリンクが内的感覚から内なる「他者」に接近するとすれば、カレル・チャペックやハシェクの「他者」は、ロボットやサイボーグ的身体を通して外形化されている。拝聴していて特に興味深かったのは、同じプラハの作家であっても、カフカやマイリンクのようにドイツ語作家の志向が内面に向かうのに対して、チャペック兄弟やハシェクのようなチェコ語作家では外形に向かう傾向がみられるということであった。

オーストリアとチェコ由来の「分身」をめぐる論考として阿部氏があげられたオットー・ランクの『分身 ドッペルゲンガー』(1914)やオトカル・フィッシェルの『分身の歴史』(1918)は、いずれも上記四名の作家たちと同時代に執筆さ



れている。むしろ、文学者の「分身」への興味は、この時代、中欧に限ってみられるものではないのだが、今回阿部氏が紹介された作家たちは、第一次世界大戦を経てのオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊からチェコスロバキア共和国の誕生へ、ドイツ語を主たる公共言語とする「プラーク」からチェコ語による「プラハ」への移行期に、内なる分身、あるいは外形化された分身を描いたことになる。

カフカの『城』や『審判』では、「プラハ城」といった固有名詞が排除され、その寓話的な世界観は普遍性を目指した結果であると解されることがある。だが、プラハと呼ぶかプラークと呼ぶかの選択のうちには、命名者の政治的立場が明示されてしまうことを知り、プラハの文学者がおかれた状況を改めて理解することができた。多民族・多言語文化が連続、変容しながら多層化していく濃厚な都市文化にあって、「他者」との接近性は、プラハの文学者らの実体験に根ざす問題であったのだろう。

次いで生駒夏美氏によるご講演「他者の語りとしての幻想文学：英文学の女性たち」に移りたい。生駒氏は、「グロテスクな身体」を描くことで精神と肉体のヒエラルキーの転倒を目指してきた英国女性作家のテクストを題材にされた。具体的には、アンジェラ・カーターとアリ・スミスの小説が紹介されたが、いずれも女性作家によるゴシック小説の古典『フランケンシュタイン』の流れをひくとと言えるだろう。

生駒氏はまず、ゴシック文学研究者フレッド・ボティングによる『フランケンシュタイン』への見解を引用するところから始められた。配布資料にある引用の一部をここに転記したい。

なぜ女性たちは『フランケンシュタイン』の物語の中でこんなにも強制的に、そして致命的に周縁化されているのか。テクスト大半からの女性の不在と消去は、政治的な意味合いを持つ問いを発する。他者性を管理しようとする秩序の中で、犠牲となり、抑圧され、排除され、殺害される「女」だが、この意味秩序の内部で攪乱的な差異の徴となる可能性を持ち続ける。なぜなら、家父長的秩序にアイデンティティを固着させようとする名指しに対して、「女」は抵抗し拒絶することができるからだ。だから、「女」は怪物的になる力を持ち合わせており、『フランケンシュタイン』において、女性たちは怪物と接続されるのである。

『フランケンシュタイン』に登場する女性は人間の女性だけではない。怪物自身も、「女性＝他者」の役割を与えられている。男性的理性を代表する科学者ヴィクター・フランケンシュタインは、死体から生命を生み出すことに成功したかに

みえて、怪物の投げかける視線からすぐさま逃げ出す。

思い起こされたのは、ホレス・ウォルポールによる最初のゴシック小説『オトランド城奇譚』(1764)だ。舞台は中世のイタリア。オトランドの領主マンフレッドの後継ぎは、超常現象により死んでしまう。マンフレッドは、死んだ息子の許嫁との間に自ら子をもうけ、血統を絶やすまいと企てるが、暴君の試みは失敗に終わる。家父長制に対する懐疑は、男性作家にもみられるものである。だが、ジェンダーの概念が変わる時代にあって、ゴシックあるいは幻想小説は、女性作家が声をあげることが可能にしたジャンルでもあった。

生駒氏はまず、ローズマリー・ジャクソンの言う「沈黙させられ、隠蔽され、不在とされてきたもの」を描きだそうとした現代女性作家のテキストとしてアンジェラ・カーターの短編『虎の花嫁』、『狼アリス』を取りあげられた。カーターの短編集 *The Bloody Chamber and Other Stories* (1979) は、ペローをはじめとする有名な童話や民話をフェミニスト的視点から書き換えているが、『虎の花嫁』は、「美女と野獣」の翻案小説ともいえる。

フランスの民話「美女と野獣」は、18世紀にフランスで出版されて以来、幾度となくアニメ化、実写化されてきた。それらの翻案作品に共通する大筋は、美女の愛により、野獣にかけられた魔法が解け、野獣は人間の男性に戻るというものである。ところが、カーター版では、人間の女性が虎の花嫁に変身する。カーターの花嫁は、賭け事に負けた父親によって野獣に売られるのだが、野獣は人間の花嫁に衣服を脱いで裸をみせることだけを遠慮深く求める。一見、野獣の性欲が言わせる要求かと思いきや、そうではない。野獣の花婿のほうは、顔にお面をつけ、衣服を身にまとっているのだ。花嫁は、裸の状態が人間にとって不自然であっても獣と同じ立場になることを理解し、父親から与えられた衣服を脱ぎ捨てる。こうして花嫁は、野獣に舐められることで獣に変身する。

『狼アリス』でも、人間と野獣の垣根が崩される。狼たちに育てられた少女は、修道院で人になるべく教育されるが、ひとり暮らしの公爵に預けられる。だが、この公爵は夜な夜な墓を徘徊しては人間の死体を喰らう狼人間なのだ。

生駒氏が注目されたのは、カーターの物語に出てくる「鏡」の役割だ。カーター文学において、鏡は象徴界、いわば「父の法」から排除されているという。狼少女のほうは、鏡に映る像が自分であることを徐々に認識しはじめるが、狼男の公爵は、鏡を見ることをやめて久しい。物語の最後に、アリスは、農夫に銃で撃たれて負傷した公爵の傷をやさしく舐める。すると、鏡は、徐々に公爵の顔をゆっくりと映し出す。この最後の場面では、公爵、あるいはアリス自ら鏡を覗くわけではないが、公平に彼らを映す鏡がある。

再び、引用されたローズマリー・ジャクソンによると、鏡と映し出された像の

間にある「近軸領域」には、オリジナルの物体も再構築された像も存在しておらず、この領域こそ、ファンタスティックな語りの怪奇領域であるという。カーターが語ろうとしているものも、人間や獣といった区別や優劣がつけられない領域なのかもしれない。

カーターに対比させ、次に注目されたのは、現役英国作家アリ・スミスだ。スミスの語りは、カーターに比べて、よりリアリズムの描写に近い。紹介された短編“The Hanging Girl”(1999) は、ごくシンプルな文体で夫婦の日常生活が描かれる。妻は、首つり状態で揺れる少女を見るようになるが、揺れる少女を自身の「影＝分身」のように感じる。だが、夫の目には映らない。スミスの描きだそうとする「おそろしいもの」は、物理的な現象ではなく、内面で感じとられる。

生駒氏によると、カーターもスミスも作風の違いこそあれ、人間の「異常性」を語る。カーターの幻想は外形に現れ、スミスの幻想は内面に現れると単純にいうことはできないだろうが、現代英国女性作家の描く幻想の表出の仕方、語りの戦略に興味をわくご報告であった。

次に、最後のご報告者、千葉俊二氏の「幻想文学のなかの科学」に移りたい。千葉氏はまず、トドロフの幻想文学の定義から始められた。「現実と非現実の間の境界の疑問視という、自己固有の営為を自己の明示的中心としている限り、幻想文学こそは文学の精華なのである。」トドロフは、幻想文学をジャンルとして研究することは、それぞれのテキストの「個別特性」を探ることではなく、いくつかのテキストに共通して機能する「規則性」を発見することだという。

物理学者であり、文筆家でもあった寺田寅彦は、すべての作品を読むことなしに、ジャンルを研究する権利があるのかと問う。だが、科学では、ある現象を記述するのに、その現象の実例すべての観察が要求されることはなく、科学の方法は演繹的であるという。パワーポイントには、月の表面と、飛行機で空から撮影された爆弾の跡の写真が映しだされた。たしかに、それら二つの模様は似通ってみえた。これは、寺田寅彦が1921年に発表した『月の表面の穴と爆弾の跡』というエッセイに掲載された写真だ。寺田は、月のクレーターと爆弾跡の形状の相似性から、月のクレーターは当時考えられていたような火山説ではなく、天体衝突の結果であると考えた。そして、天体衝突は、物理的に爆発と同じであると推論したのだ。

寺田は、未知ではあるが、統計的法則が自然現象にはあるはずであると仮説をたてたのだが、自然現象を超え、人間社会で生み出される現象にもアナロジーの方法を適応した。こうした寺田の発想は、コンピューターによる複雑な計算が可能になった1970年代に、ブノワ・マンデルブロによって構築されたフラクタル幾何学の先駆けであったといえる。



フラクタルとは、「大」が「小」の相似形を幾重にも含むような入れ子構造のことだという。簡単に言えば、「自己相似性」であり、枝に生える葉の連なりが全体の本の生え方に似ているというような、自然界に多くみられる現象である。配布資料にある、マンデルブロの『フラクタル幾何学』から引用すると、「最も有用なフラクタルは偶然性を含み、その規則性と不規則性は統計的である」。フラクタルを生成する式は、極めて単純かつ明確なルールで規定されていても、初期条件の僅かな違いが極めて大きな結果の違いとして現れ、その個々の結果の予想はつかないという。ただ、結果の集合については、統計的な処理が可能になり、全体の方向性を議論することが可能となる。このことは、文学のジャンルと個々の作品論の関係性に応用して考えることができるかもしれない。

千葉氏によると、作者個人も、その似姿である個々の文学作品も複雑であり、言葉の一語一語が選択されるときには、作者の意識を超えた大きな範疇が作用していると考えられる。だが、作者がその言葉を選択した理由（法則）がわからなくても、その選択は作者個人の自由意志だという。よって、文学は、物語の「力学＝法則」と作者の「自由意志＝モラル」が相互干渉しあう場として想定される。場合によっては、偶然としかいいようのないことも、自由な選択とするところに千葉氏の文学者としての在り方が見出されるのではないか。

千葉氏に取りあげられた日本近代幻想文学の中でとりわけ興味をひかれたのは、中島敦の短編『かめれおん日記』（1942）と『文字禍』（1942）である。『かめれおん日記』の主人公「私」は、「俺というものは、俺が考へてゐる程、俺ではない」と言う。こうした自己の統一性への懐疑は、『文字禍』では、言語観において追究される。ヨーロッパ初期のゴシック小説と同様、物語の舞台は、著者の生きる時空間から遠く離れた設定だ。古代アッシリアの碩学ナブ・アヘ・エリバ博士は、文字の霊が人に及ぼす災いを確信するものの、最後には文字の霊の呪いによって書物の下敷きとなり死んでしまう。

老博士は、一つの文字だけを終日見つめて過ごす。すると、いつしか文字はバラバラの線に解体し、如何にしてその文字がその音と意味を持つのかわからなくなってしまふ。ゲシュタルト崩壊を経験した老博士は、文字に精霊が宿ることを確信する。さらに、文字を覚えたばかりの人たちに合わせてみると、文字を覚える前と比較して、職人の腕は鈍り、猟師は獅子を撃ち損じ、戦士は臆病になるという統計があらわれる。その結果、博士は、獅子という字を覚えた者は、本物の獅子の代わりに獅子の「影」を追うようになったと考える。

『文字禍』の内容を拝聴しているとき、すぐにソシユールのことが頭に浮かんだ。ソシユールは、言葉は物の名前ではなく、言語を「差異の体系」としてとらえた。ひとつの言語記号は、表記と内容が結びついたものであるが、その結びつ

きに歴史的必然性はなく、偶然の結果にすぎない。老博士は、なぜその文字がその形でなければならないのか、また特定の意味を担うのかという不思議に直面し、「偶然」だと結論づける代わりに、言葉の「精霊」を確信したのだろう。そこには、作者中島自身の言葉に対する願望が反映されているのだろうか。

千葉氏はまた、谷崎潤一郎の言語観—「言語は万能なものではないこと、その働きは不自由であり、時には有害なものであること」(『文章読本』1934)を紹介された。人間は、もはや言葉を操る主人ではなく、言葉ぬきでの「リアル」を知る由もないという近代文学者の言語観は、ソシュール以降の構造主義的な思想を思わせる。

千葉氏によると、近代日本文学者の多くが、「偶然」が主体の意思を阻害する不安感を反映させた小説を残している。この「偶然」を「他者」に置き換えることもできるだろう。近代日本文学者は、偶然の支配する混沌とした世界の似姿—「文学」の中に「法則」を探ろうとしたが、この場合、「偶然としての他者」は歓迎されるというよりは抑圧したいものなのかもしれない。

「異文化＝他者」との共存が死活問題であったプラハの作家、家父長制において「女性＝他者」の解放を目指すフェミニスト作家、日本の西欧化がもたらした「近代的自己」に綻びを見出した日本の男性作家では、「他者」の概念も表象も異なって当然であろう。本シンポジウムは、「幻想文学」を規定するものとして「分身」という共通の鍵概念から出発したが、「都市空間」、「フェミニズム」、「フラクタル理論」など、各講師の「個性」が聴衆に響く、素晴らしいものであったと思う。

#### 参考文献

- 阿部賢一 『複数形のプラハ』 人文書院、2012年。
- 生駒夏美 『欲望する文学—踊る狂女で読み解く日英ジェンダー批評—』 英宝社、2007年。
- 千葉俊二 『文学のなかの科学：なぜ飛行機は「僕」の頭の上を通ったのか』 勉誠出版、2018年。

研究発表 2019 年

2019 年 1 月例会 (早稲田大学)

- 「放浪者像」の比較文学  
—アメリカ大衆文化の原風景を探る—

専修大学 中垣恒太郎

- 特別研究発表  
pun (しゃれ) の効用  
—脚韻と頭韻／掛詞と縁語—

東京大学 (名誉教授) 川本皓嗣

2019 年 3 月例会 (早稲田大学)

- 講演  
小野二郎のウィリアム・モリス研究

日本女子大学 川端康雄

2019 年 4 月例会 (二松学舎大学)

- 20 世紀初頭の美術交流における新納忠之介の活動
- 日本児童文学界におけるマルシャーク作品の受容

茨城大学 清水恵美子

早稲田大学 (非常勤) 南平かおり

2019 年 5 月例会 (二松学舎大学)

- 特集  
「反米」が腐食する時代  
—反米・嫌米・離米—

東京大学 遠藤泰生、同 安岡治子

2019 年 7 月例会 (清泉女子大学)

- 北村透谷と陶淵明における「故郷」概念の比較研究
- 21 世紀日本のシェイクスピア・アダプテーション

東京外国語大学 (院) 陳璐

駒沢女子大学 松山響子

2019年9月例会（清泉女子大学）

- 昭和前期におけるバイロニズム  
—鶴見祐輔と林房雄を中心に—

都留文科大学 菊池有希

- 翁久允と竹久夢二の旅と豪華客船ディナーメニューに見る昭和初期のガストロノミー  
公益財団法人翁久允財団 須田満

第57回東京支部大会（東海大学高輪キャンパス）

【研究発表】

- 陳舜臣初期作品研究  
—『怒りの菩薩』を中心に—

東京大学（院）孫安祺

- 「中国派」比較文学の誕生と変遷  
—1971年の台湾から現在の中国まで—

日本社会事業大学（非常勤）橋本恭子

- 「引揚げ」をめぐる語りの諸相と「引揚げ文学」

千葉大学（院）末益智広

- イギリスのロシア研究誌 *The Russian Review* の役割  
—共同編集者ペアズとベアリングを中心に—

日本学術振興会特別研究員 松枝佳奈

- 金子文子『何が私をこうさせたか』におけるルソー受容の可能性

日本大学 安元隆子

- 福永武彦の音楽  
—小説における音楽的構造の一考察—

聖徳大学 近藤圭一

【シンポジウム】

- 現代幻想文学の可能性を探る  
—「私」「自己」のテーマ群を中心に—

司会：東京大学（名誉教授）井上健

講師：東京大学 阿部賢一

国際基督教大学 生駒夏美

早稲田大学（名誉教授）千葉俊二



2019年11月例会（大妻女子大学）

■ 裏切られた漫画

—八島太郎のプロレタリア美術とグラフィック・ノベル—

二松学舎大学 足立元

■ 明治期における写実思想の展開に関する一考察

—生人形へのまなごしを起点として—

都留文科大学 野口哲也

2019年12月例会（大妻女子大学）

■ リチャード・ライトの俳句世界

—自然界の中の「実存」—

青山学院大学（非常勤） 岡本さだこ

■ シリーズ《比較文学の方法》④自由討論「越境の門前で見えるもの」

## 執筆者一覧

(敬称略)

- 内山加奈枝 日本女子大学

## 編集後記

コロナに明け暮れた1年でした。支部会員のみなさまにおかれましても、なれない遠隔授業の準備やZoomでの会議などに追われ、キャンパスに足を踏み入れることがない割にはお忙しい日々を懸命に過ごされたのではないのでしょうか。

こうした異常な時期にあって、東京支部では春からの例会、支部大会が相次いで中止となり、研究発表を予定されていた会員のみなさま、また発表を楽しみにしていた方々には大変ご心配とご迷惑をおかけいたしました。こうした支部活動の停滞状況をなんとか打破ろうと、本年は特別に『東京支部研究報告』への論文投稿の制約を弛めて全支部会員に応募資格を与えるとともに、締め切りも大幅に延期して多数の投稿をお待ちしております。しかし、応募論文はほとんどなく、検討の結果、本号に掲載することはできませんでした。それほど私たちの日常がコロナに侵食されていたという証なのかも知れません。

したがって、今号の『東京支部研究報告』に掲載されているのは、2019年10月に東海大学において開催された東京支部大会のシンポジウム、「現代幻想文学の可能性を探る—「私」「自己」のテーマ群を中心に—」についての内山加奈枝氏による傍聴記と「記録」のみということになります。寂しい内容となってしまいましたが、シンポジウム開催の経緯から当日の登壇者の発言に至るまで、精彩に富んだ記述をお読みいただきたいと思えます。

年が明けてもコロナ禍の勢いは衰えを知らず、2度目の緊急事態宣言が出されてもなお、感染者数などが減少に転じる気配が見えません。とはいえ、もはや感染症の蔓延に茫然自失している時期は過ぎたはずです。支部会員のみなさまが、ポストコロナを見据えて文学研究の研鑽を積み、その結実を『東京支部研究報告』に多数お寄せくださる日をお待ちしております。

(椎名正博)

# 電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文 投稿規定

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』（以下、「電子版『研究報告』」）は、原則として毎年一回、11月末日に発行される。電子版『研究報告』への研究論文の投稿は、以下に定める手続きによるものとする（現今の新型コロナウイルスによる感染症流行により、大学など研究環境に大きな変動が予想されるため、締め切りなどについては今後変更される可能性がある）。

## 1. 投稿資格

研究論文の投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演等を行なった者とする。投稿者は、支部例会または支部大会における各自の発表をもとに、投稿論文の原稿を作成すること。

## 2. 論文の字数（語数）および書式

投稿論文の字数（語数）および書式等については、別に定める「電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文執筆要領」に従うこと。

## 3. 論文の提出

投稿論文の電子媒体のファイルを、8月16日から8月31日までに、以下の送付先に送付すること。

送付先：日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 椎名正博  
pegasus@w2.dion.ne.jp

## 4. 採否の決定

投稿論文の採否は、東京支部編集委員会および企画委員会が査読の上、決定する。なお、必要と認められる場合には、上記両委員会の委員でない支部会員に査読を委嘱することがある。

## 5. 著作権等

投稿者は、電子版『研究報告』に掲載された研究論文の著作権を有するが、掲載が決定された時点で、日本比較文学会東京支部がワールドワイドウェブによって公衆送信することを許諾したものとする。



# 電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文 執筆要領

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への研究論文の投稿にあたっては、以下の執筆要領に従って原稿を作成すること。

## 1. 使用言語

使用言語は日本語、英語またはフランス語とする。

## 2. 字数（語数）

原稿は横書きとし、注等を含めて、日本語の場合は8,000～12,000字とする。英語およびフランス語の場合は3,500～5,000語とする。

## 3. 書式

東京支部のホームページより、投稿用のテンプレート（ひな形）をダウンロードして使用し、テンプレートに記載された書式に関する留意事項を踏まえて、原稿を作成すること。

## 4. 図版の使用

写真、図、画など図版を挿入することもできるが、図版が占めるスペースも、規定の字数のうちに含まれるものとする。また、図版の掲載に関する著作権等の問題の解決は、すべて投稿者の責任において行なうこととし、十分に著作権法を尊重するよう注意すること。

日本比較文学会東京支部 研究報告 No. 17

発行人 佐藤宗子  
発行日 2021年2月12日

編集委員会（編集担当）

委員長 椎名正博  
委員 鈴木美穂 高柳聡子 永井久美子 堀江秀史 安元隆子

事務局 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1 東海大学  
文化社会学部 文芸創作学科

TEL : 0463-58-1211

E-MAIL: hikakubungakutokyo@gmail.com